

『うつほ物語』における忠こそ物語の意義とその特徴

尹勝玟*

(e-mail : miny98@hanmail.net)

<目次>

- | | |
|-----------------------------|-----------------|
| 1. 序 | 4. 『うつほ』から『源氏』へ |
| 2. 忠こそ物語の成り行きと発展の可能性 | 5. 終わりに |
| 3. あて宮求婚者としての忠こそ：高僧と懸想人の両面性 | |

キーワード：忠こそ(Tadakoso), 継子いじめ譚(*The Story of Mamako-ijime*), 懸想人(Person who fell in love with someone), 多面性(Various facets), 『源氏物語』への影響(Effects on *the Tale of Genji*)

1. 序

平安時代中期に作られた日本最古の長編物語として知られている『うつほ物語』。この作品は主に、俊蔭一家の秘琴の伝授とその栄華を描いているとよく知られているが、長編物語ということもあり、そのほかにも多様な人物が登場し、さまざまな場面を作りながら、一つの作品を成している¹⁾。

本稿ではそのなかでとくに「忠こそ」という人物に注目して、考察を進むことにする。この人物は物語の前半の一部を中心に登場するが、「忠こそ」という自分の名前から由来した巻名があるくらいで、この物語のなかの重要人物の一人として扱ってもよいであろう。忠こそに関する

* 韓国外国語大学日本語通訳学科 非常勤講師、日本古典文学

1) 『うつほ物語』の成立事情に関しては、平安朝の有名な作品である『蜻蛉日記』『枕草子』『源氏物語』などに『うつほ物語』の歌や内容がひかれていることなどから、円融朝(969-984)にはかなりの部分がまとまっていたと思われるが、日本初の長編物語が一次的に成立したとは到底考えられず、複雑な成立過程を経て最終巻は一条朝(986-1011)まで降るとされている。室城秀之(2002)『うつほ物語』『源氏物語辞典』大和書房、p.79。

先行研究としては、「忠こそ」巻の成立問題を論じたものが多い。『うつほ物語』が日本初の長編物語ということは前述したが、そのなかでは俊蔭系の物語と正頼系の物語が話の軸を成している。それをもとにして多様な人物や設定などが取り入れられるかたちで本作品が長編化されたのであるが、「忠こそ」巻はこうした系統とは違う、独立性をもった独自の話として存在していたといわれる²⁾。そして「忠こそ」巻は継子いじめ譚と忠こそが僧侶としての道を進むようになった理由を明かす、いわゆる発心譚が主な内容となっているが、以降、いかなる方法であって宮求婚譚として発展し、そこに働いている物語の論理とはいかなるものかということもしばしば論じられてきた³⁾。そのほかにも、多角的な観点から忠こそに関する研究が行われているが、こうした日本での研究成果とは別に、韓国では『うつほ物語』の研究自体がまだそれほど進んでいない状況であり、そのうえ、忠こそに対する研究は皆無である⁴⁾。

忠こそという人物は、子供の際は継子いじめ譚の主人公として、そして成長するにあたり、信心深い僧侶として描かれている一方、後半ではあて宮に求婚する懸想人の一人として描写されるなど、多面的な人物像をみせている。一言では語られない彼のこうした造型にはきっと作者の意図が秘められていると思われる。したがって、本論文ではそうした問題などを念頭に入れ、忠こそをさまざまな角度から分析し、物語におけるその造型の意義や特徴を明らかにしたいのである。それに加え、忠こそ像が後の平安朝物語に与えた影響などを考察するのも本稿の目的の一つとする。

2. 忠こそ物語の成り行きと発展の可能性

「忠こそ」巻は現存する『うつほ物語』において、「俊蔭」「藤原の君」に続き、第

2) 室伏信助(1995)「忠こそ物語の位置」『王朝物語史の研究』角川書店、pp.124-125.

3) 大井田晴彦(1995)「忠こそ物語の位相－『うつほ物語』の論理－」『国語と国文学』東京大学国語国文学会、pp.27-40.

4) 検索サイト「RISS」で「うつほ物語」「宇津保物語」、あるいは「우쓰호 모노가타리」「우쓰호 이야기」で検索される論文は10本以内である(김효숙(2015)「『우쓰호 이야기(うつほ物語)』에 보이는 파사국(波斯国)에 대하여－『왕오천축국전(往五天竺国伝)』과의 접점－」『동아시아고대학』40, 동아시아고대학회, pp.217-240. 柳瀨先(2018)「『宇津保物語』における秘琴の信仰的な様相」『日本思想』34、韓国日本思想史学会、pp.163-187など)。そして、タイトルに「うつほ」という言葉はないが、キーワードおよびその内容が『うつほ物語』と関係がある論文もないわけではない(김영찬(2012)「葵祭를 통해서 본 일본문화 연구」『일본어문학』58, 일본어문학회, pp.351-366. 尹勝玟(2016b)「文学作品創作の原動力としての歴史的準拠考察－相撲の節会を中心に－」『日本語文学』73、日本語文学会、pp.229-254など)。こうした例から韓国における『うつほ物語』の研究は今の段階でまだほとんど行われていないといっても過言ではないだろう。RISS <http://riss.kr/index.do>(検索日:2019.06.12)

三番目に位置する。そして、その冒頭は次のように語り起こされている。

かくて、また、嵯峨の御時に、源忠経と聞こゆる左大臣おはしけり。また、右大臣橘千蔭と申すおはしけり。世の中に、かたち清げに、心かしこき人の一に立てられ給ふ。朝廷に仕うまつり給ふにも、身の才、人にまさり給へり。帝は、時めかし給ふこと限りなし。一年に、二度三度、官爵賜はり、日ごとに加階まさりつつ、歳三十にて、左大将かけたる右大臣になり給へり。御妻には、一世の源氏、かたち清らなる名取り給へるが、十四歳なるを得給ひて、住み給ふほどに、十六歳といふ年の五月五日に、玉光り輝きたる男の、いとをかしげなるを生み給へり。名をば、忠こそといふ。その子を、また思ふ人なく、類なく限りなき御仲にて、これもかれも、かたみに、心ざし深くのたまひ契りて経給ふほどに、忠こそ、生ひ出で来るまに、かたち清らなること限りなし（忠こそ、111）⁵⁾

嵯峨帝の時、当時の右大臣として橘千蔭という人物がいた。彼は世間で容貌も美しく、聡明な人の第一に認識されており、朝廷に仕えた際も、その才学はほかの人より勝っていたという。帝からの寵愛も厚く、一年に二度三度も昇進し、三十歳で左大将兼右大臣になるぐらいであった。北の方は、一世源氏の、美貌で評判も良い方で、彼女が十四歳の時、千蔭と婚姻し、十六歳の時、男の子を生んだが、その子も玉のような光り輝く赤ちゃんで、名前を忠こそと付けたという。そして忠こそがいかに両親に大切思われ、育てられているかが記されている。

「忠こそ」巻のタイトルが示すように、この巻は主人公である忠こそ誕生と両親の紹介から始まる。実はこのように時間や空間の設定、主人公の家族構成および主人公の誕生と紹介、そして主人公の特異性、予言などを語る記法は物語の常套的な書き出しであるが⁶⁾、こうしたことから前述したように、忠こそ物語が『うつほ物語』のなかで独立性を保った独自の物語として存在していたと古くから認められたのである。忠こそがいかに両親に大

5) 作品の本文の引用は次のようである。

①『うつほ物語』：室城秀之(1995)『うつほ物語』おうふう

②『源氏物語』：阿部秋生 他校注訳(1994-1998)『源氏物語①-⑥』新編日本古典文学全集、小学館

③『住吉物語』：三角洋一 他校注訳(2002)『住吉物語 とりかへばや物語』新編日本古典文学全集、小学館

引用部分の括弧内の表記は巻名、巻数、頁数などを表す。なお、引用に際しては表記を私に改めた部分がある。

6) 高橋亨(1974)「物語の発端の表現構造—宇津保から源氏への物語史的過程—」『日本文学』23-6、日本文学協会、pp.56-67.

切に育てられてきたかは上で引用した物語の本文にも記されている通りであるが、しかし、そのような忠こそその人生に不幸が始まる。忠こそその五歳のとき、わが子忠こそをこの上なく愛してくれた母親が突然亡くなるという事態が起きた。子供の将来を考える際、母親の存在の重要性は言うまでもない。そのような母の不在、それは忠こそこのこれからの人生がきつと茨の道であることを暗に示していると考えてもよいのであろう。そうした事態を懸念したためであろうか、死ぬ直前、忠こそその母親は夫である千蔭にただ幼い子供を残して亡くなることに対する不安や心配、そして切ない気持ちなどをいろいろ語った後、次のような遺言を遺す。

誰も誰も、親にはものし給へど、小さき時は、女親のごとはあらぬものなり。よし、いかがはせむ。おのれに代はりて、腹汚き人につきて、悪しき目見せ給ふな。腹汚き人ありて、悪しきこと聞こゆる人ありとも、言はむ人の罪になし給へ。すべて、わが子のため悪しからむことをば、水の上に降る雪、砂子の上に置く露となし給へ(忠こそ、111)

ここで忠こそその母はまず子供にとって母という存在がいかに重要かつ必要であるかを強調する。この言葉は『源氏物語』で六条御息所が源氏に遺言を遺す場面で「まことにうち頼むべき親などにて見ゆづる人だに、女親に離れぬるは、いとあはれなることにこそはべるめれ」(濔標②311)と母親の大事さを語った部分とも相通じる。

遺言において母親の重要性が繰り返し説かれる理由はいかなるものであろうか。子供の訓育に母親が重要な役割を果たすという理由も無論あるが、母親の死によって生じるかもしれないわが子の不幸を何より懸念する意識によるものであるといえよう。そこで忠こそその母も自分が子供の世話をするのがもっともよいことであるが、それが不可能になった今は、「腹汚き人」、すなわち継母による息子忠こそへの奸計を恐れ、絶対そのような人に惑わされないことを強く訓戒したのである。この「腹汚き人」に対する言及は継母の登場への伏線でもあり、実際、忠こそ物語は以後継子いじめ譚として展開される。つまり、千蔭が忠こそその母の遺言を遵守せず、忠経の未亡人(一条北の方)という好色な老女のもとに通ったことがきっかけで忠こそ物語は継子いじめ譚として発展するのである。

右大臣であった千蔭が妻を亡くした後、「世の中にありとある上達部・親王たち、女子持ち給へるは、女方より、『名高き大臣にもし給へば』とて、降る雨のごとに言ひ来れど、女君ののたまひし言を思して、聞き過ぐし給ふ」(忠こそ、112)と記されているように、頻繁に求婚を申し込まれたにも関わらず、妻の遺言を大切に守り、長い間女性と関りを持たず、ただ息子の忠こそのみを大事に育てていたそのころ、「忠こそ」巻の冒頭に言及され

た左大臣である源忠経が亡くなる。すると、比類のない財宝の持ち主であった忠経の北の方が、千蔭に懸想をし、「このみや浅茅繁きと思へどもまた葎生ほす宿もありとか」(忠こそ、113)と、伴侶を失った者同士の付き合いをしたいという歌まで贈るようになる。実は、「男はただ今三十余、女は五十余ばかりなり」(忠こそ、113)と書かれているよう、二人の歳の差は二十歳も離れており、男女関係というよりは、むしろ親子といってもおかしくないほど奇妙な関係であった。

千蔭は相手の立場を思って心ならずもその北の方の所に通うようになるが、一方、亡き妻の遺言を固く守ろうとしたため、結局北の方とは疎遠になる。そこで北の方は今度は千蔭ではなく、その息子である忠こそに「気色ある消息」(忠こそ、118)を贈り、言い寄ってみたが、故左大臣の姪を恋しく思っていた忠こそは、北の方の歌に父親との関係を理由に湾曲に断る。そうした忠こそへの反応に屈辱を感じた北の方は、それを恨み、忠こそへの復讐を企てる。本格的な継子譚いじめがここで始まるのである⁷⁾。

北の方は千蔭が正月の内宴の時に使ったまま一条邸に置き忘れた「祖^{おや}の御時より、次々伝はれる名高き帯」(忠こそ、118)を取り隠し、ひそかに博打に蔵人所に売りに行かせ、まるで忠こそがそれを盗んで売るかのように、その罪を忠こそに被せようとする。その石帯は先祖代々に千蔭の家門に伝授された由緒深いもので、「上、御覧じて、『この帯奉らば、位をも譲らむかし』と仰せられしを、しばし、思ふ心ありて、奉らざりし」(忠こそ、119)とあるように、時の帝が千蔭に「この石帯を献上すれば帝位を譲る」とまで語ったのを、もし自分に子供ができたならその子に与えたいと思い、帝の提案を断るほどの、世に珍しく、かつ千蔭にとって最も大事なものであった。その石帯をわが息子が盗み、売ろうとする事態を千蔭が到底信じるはずがない。

しかし、一条北の方は自分の奸計が失敗に終わったにもかかわらず、またもや策略を図る。忠こそが帝に讒言して父を失脚させようとしているという噂を流したのである。それがようやく千蔭の耳にも入り、それから息子忠こそに対する千蔭の気持ちに変化が生じた。当初は「あやしきことなり。忠こそ、わが上に、さることを言はむやは」(忠こそ、123)と断然と忠こそへの信頼を示した千蔭であったが、度重なる奇妙な出来事に「『いとあやしきことをも聞くかな』と思ほしわづらふ」(忠こそ、124)と記されているように、次第に心穏やかではなくなり、果てには「忠、世に出で来て後、いささかなることを知らずなむあるを。されど、我を

7) 物語の本文に、北の方を指して「継母の北の方」(忠こそ、118)という名称が用いられており、いよいよ継子いじめが始まることを暗示している。

あひ思はぬやうに聞こゆれば、え思ひ果つまじくなむある」(忠こそ、125)と、これ以上忠こそを信頼し、愛する気持ちを持ち続けることは不可能だとする。深まっていく息子への不信の気持ちが如実に表れている。自分の身の回りに一体どういうことが起きているかをまったく知らず、ただ宮中から里下りした忠こそにとって、こうした父の発言と自分に対する冷たい態度はあまりにも衝撃であった。父の愛情を今まで一度も疑ったことのなかった忠こそはこうした事態に絶望し、世を患いと思い、煩悶の末、出家の意を固める。

忠こそ、「あやしものたまふかな。何ごとか侍るらむ」と聞こえて、涙をほろほろとこぼして、立ちぬ。曹司に籠り臥して思ふ、「ここの年ごろ、『天を逆さまになすとも、伴の兵して、親を射るとも、汝が咎とは咎めじ』と言ひわたり給へるを、御ために、いささかなる過ちも仕まつらず、塵ばかりの気色も見えぬを、いかに、『重き罪あり』と聞こし召して、かくのたまふらむ」と、恐ろしく、恥づかしく、思ひ焦がれ臥せり。(中略) 忠こそ、「さらに、おとどに見え奉らじ。山林に入りなむ。親の片時見え給はぬは、心細く悲しくこそおぼゆるに、許されぬ御気色を見つつは、何を頼みてか、宮仕へもせむ」と思ひつつ、入り籠りておはす。(忠こそ、125)

何事につけても親を信じ、親に逆らったり、また過ちと思われそうなことは何一つ犯した記憶がないのに、父千蔭が急に冷淡となり、さらに思いもよらぬことまで言われた忠こそはその後、悲しみのあまり、世間との関りを絶ち、山に入ることに、つまり出家することを決める。父に棄てられ、ただこの世に自分一人だけが残されたという認識のなか、忠こそが選べる道はそれしかなかったであろう。それから五日目の朝、偶然に出会った鞍馬から訪れた山伏に従い、いよいよ出家の意を果たす。

「忠こそ」巻における忠こそ物語は主人公の誕生の話から始まり、継子いじめ譚を経て出家譚としてその幕を閉じる。無論、忠こそが家を出た後にも話は続き、忠こそがいなくなったことをやっと分かった父千蔭の後悔と死、そして彼をいじめようと奸計を立てた一条北の方の零落した様子などが語られ、ようやくこの巻は終わる。忠こそは継子いじめ譚は、誤解、虚言、思い込みなどによって展開されるという特徴がある。継母である北の方の誤解を端緒として、千蔭の事の真偽を問わぬ対応によって思わぬ方向に発展され、最後には虚言や思い違いに振り回され、忠こそは悲劇的な結末を迎える⁸⁾。

実はこの継子いじめ譚というのは日本独自のものではなく、話型として全世界に広まってい

8) 中野幸一(1996)『うつほ物語』1(日本古典文学全集)、小学館、p.236.

る。よく知られている有名な話としては「シンデレラ」「白雪姫」などがあり、日本古典文学にもかように継子いじめを扱った作品がいくつかある⁹⁾。『落窪物語』『住吉物語』などがその代表作であり、こうした作品から当時の継子いじめの実状を垣間見ることができる。両方とも実母を亡くした姫君が意地悪な後妻にいじめられるが、やがて貴公子の助力によってその危機から脱し、最後は幸せになるというパターンである。日本古典文学における継子いじめ譚は主に女性が虐待を受ける話が多い。当時の一夫多妻制のなか、姫君はその結婚によって家門の繁栄につながる重要な役割を果たす大切な存在であった。そういう場合、先妻の娘は自分の娘の将来の妨げとなりかねない。そういう可能性を未然に防ぐため、わが子への愛情の表れとは裏腹に、先妻の娘に憎しみを感じ、徹底的にいじめたり、また社会からの断絶を謀り、貴公子との出会いの機会さえ与えようとしなかったりする¹⁰⁾。

また、継子いじめ譚は遺言とともに物語に表れる場合が多い。『住吉物語』では、最愛の娘の将来を案じた母宮が亡くなる前、「さて我、はかなくなりなば、この姫がことこそ心にかかりおぼえはんべれ。返すがへすも、並み並みならん御ありさまをさせたまふな。いかにも帝の御目にかけたてまつりたまへ。異娘におぼしめしあらず御覧せんことこそ、何よりもうれしくおぼえはべらん」(『住吉物語』上巻・18)と、夫に対し、他の娘があってもこの姫君をより大切に育てること、そして絶対人並みのありさまにはさせないで必ず帝に入内させることを頼む。死を直前にして子供を遺してこの世を去らざるを得ない母の悲しみ、心配や愛情などの複雑な感情がこうした遺言を通して表れたに違いない。そのほかにも、『秋月物語』『伏屋物語』『小落窪』『一本菊』『朝顔の露の宮』など、中世物語の継子いじめ譚の中では遺言が語られる作品がわりと多い¹¹⁾。この忠こそ物語も継子いじめ譚であると同時に、遺言とも結びついている。わが息子の将来を案じ、父千蔭に忠こそそのことを切実に願ったその遺言も空しく、忠こそはすでに見てきたように、継母である一条北の方の謀略に巻き込まれ、亡き母が心配したような不幸な結末を迎える¹²⁾。忠こそ継子いじめ譚は、

9) 継子いじめ譚について日本で行われた先行研究は数多くある。そのなか、韓国では金鍾徳(2010)「継子譚의 伝承과 궤리디」『日本語文学』48、日本語文学会、pp.261-280などの論文がある。

10) 平安時代の一夫多妻制などの結婚制度がこのような実態をもたらした主な理由であるといえよう。平安時代の結婚に関する研究は青島麻子(2015)『源氏物語 虚構の婚姻』武蔵野書院、pp.1-367。김영찬(2011)「『蜻蛉日記』를 통해 본 平安時代の 結婚様相考察」『日本語文学』55、日本語文学会、pp.277-292。李施昉(2012)「平安貴族の結婚と身分意識」『日本語文学』56、日本語文学会、pp.193-212などがある。

11) 尹勝玟(2016a)「平安朝物語における「遺言」の考察—当時の社会的実状の反映という視点から—」『翰林日本学』28、翰林大学校日本学研究所、pp.5-32。

12) こうした「忠こそ」巻の結末について、大井田晴彦氏は、一族の宝器である琴を安易に弾くことを固く禁じた俊蔭の遺言をきちんと守った俊蔭一族と、千蔭妻遺訓を放棄した千蔭との比較を通し、遺された

いじめの対象が女性の多い諸作品の傾向とは異なり、男子が主人公であるという点から何よりその意義を見出すことができる。さらに素材としての継母子譚のなか、この『うつほ物語』の「忠こそ」が文学作品として最も古いものであるとその意義を評価する研究などもある¹³⁾。

このような意義を持っている「忠こそ」巻の後半部は、忠こそを疑った千蔭の誤解はすべてが一条北の方の陰謀によったことが明らかになり、しきりに自分の行動を後悔する千蔭の様子が描かれているなど、継子いじめ譚の後書き的な性格を持っている。しかし、ここで注目すべきことが一つある。それはほかならぬ忠こそが出家を前にした際、実は琴を弾いたということである。

忠こそ、世の中思ひ離るるにも、二つなむありける。一つには、「かの梅壺の君に、物をだに聞こえずなりなむこと」と思ひ、今一つには、「年ごろ弾き遊びつる都風を、また弾かずなりなむこと」と思ふ。また、親の御上をば、さらにも言はず。おとど物に出で給ひ、人どもなき折なりければ、この琴を一声掻き鳴らし給ひて、竜角のもとに、かく書きつけ給ふ。

弾く人もむなしくならば琴の音も空蟬のみや今は調べむ
と、泣く泣く書きつく。(忠こそ、127)

忠こそその弾琴は今まで物語のなかでは一度も語られることがなかった。それにも関わらず、ここで唐突にも「この琴を一声掻き鳴らし給ひて」とあるように、実際忠こそが琴を弾く場面まで描かれているのである¹⁴⁾。いったい作者はいかなる理由で整合性が合っていないにも関わらず、ここで忠こそその弾琴の場면을わざわざ記したのであろうか。それにはきっと作者の意図が秘められているに違いない。

忠こそ物語は主人公の誕生、成長から継子いじめという紆余曲折を経て良きも悪きも出家という結末に至る。すると、ここで一つの独立した短編物語の体制が完成され、実はそのまま幕を閉してもおかしくない状況である。しかしながら忠こそその出家の場面で『うつほ物

人々の遺言に対する姿勢がきわめて対照的で、それが忠こそ物語が長篇の主流を占めるに至らなかった理由の一つであると論じている。(大井田晴彦(1995)前掲論文、p.29)

13) 室伏信助(1995)前掲論文、p.131.

14) 忠こそがここで弾いた琴は「忠こそ」巻の本文では「都風」と書かれているが、「俊蔭」巻で仙人から琴をもらい、それを持って日本へ帰ってきた俊蔭が各人物に琴を配る場面では「せた風をば、帝に奉る。山守風をば、後の宮に奉る。花園風をば、春宮に奉る。都風をば、春宮の女御に奉る。かたち風をば、左大臣忠経に奉る。織女をば、右大臣千蔭に奉る」(俊蔭、20)とあるように、千蔭がもらった琴の名は「都風」ではなく「織女」である。

語』の本流ともいえる俊蔭の琴の話が急に持ち出され、忠こそと俊蔭、あるいはその一族との関連性が新たに動き出そうとしている。そのような忠こそ物語は短編として終わることなく、出家後、しばらくして彼は再び物語に登場する。ここで描かれている弾琴の場面は、以後の物語の展開を考える際、忠こそその再登場とそれに伴う忠こそ物語の長編化への伏線¹⁵⁾としては働いているといえるのではないだろうか。継母のいじめによる誤解がもたらしたその出家の話は、この後いかに織り成されていくのであろうか。次節ではその話の行方と意義についてさらに詳しく考えてみたいのである。

3. あて宮求婚者としての忠こそ：高僧と懸想人の両面性

「忠こそ」巻で鞍馬の山伏に従い、出家の意を果たした忠こそが物語に再び登場するのは次の「春日詣」巻である。この巻は源正頼の盛大な春日神社参詣の様子を描いた巻で、正頼家の人々が歌会を開き、歌を詠み合っているところ、熊野へ向かっていた忠こそが偶然にも春日神社に立ち寄る。

かの忠こそが行ひ人、かの暗部山に、大いなる寺を造りて、父母が御ために、厳しき経・仏供養し、人に物も言はず、ただ仏の御言をのみ、寢言にも口遊びにもしつ行ふ、かのつきし人は、かしこき智者にて、大法など尽くして受けたりければ、それらを皆受けて、暗部をばさる修行したる所にて、六十余国を巡りて、神に読経奉りて、近き所に詣づるに、この春日にも詣でて、夜一夜、大般若おほぞうに読みつつ奉りて、「今は、熊野に」と思ひて出づるに、この御前に遊ばず御琴の音する方に向きて、疾き足をいたして走る。(春日詣、144)

忠こそその再登場の場面であるが、出家後の忠こそその様子が記され、前半には仏道修

15) 当該場面の新全集『うつほ物語』の頭注にも同様のことが記されている(中野幸一(1996)前掲書、p.239)。また、大井田晴彦氏は忠こそがあたかも陀羅尼の声に導かれるがごとく鞍馬の行者と出会い、出家を遂げてしまう場面において、俊蔭が波斯国に漂着した際、「琴の音に通へる響」によって自分が「天女のゆくすゑの子」である意識を強める場面との類似性を主張する。つまり「声」「音」に導かれ、俗から聖なる存在へと転換していくパターンが似ていると両者の関係性に注目しているのがある。そして結論的に「忠こそ」が「俊蔭」と発想の上できわめて共通した基盤を持っているとし、「従来、短篇としての独立性が強調されてきた忠こそ物語であるが、長篇の中に占める位置は決して軽くない。むしろ俊蔭系の物語との結びつきはきわめて緊密なものであるといえよう」と忠こそ物語の長編化における俊蔭物語との関連性について述べている。大井田晴彦(1995)前掲書、pp.27-40。

行に誠心誠意を尽くして生きてきた彼の人生の軌跡が、後半には忠こそが春日神社に訪れた理由が明らかになっている。はるかに聞こえてくる琴の音に導かれ、正頼らの前に姿を表した忠こそ。しかし、僧侶が神社に訪れたことに対し隨身や舎人に咎められたが、折しも忠こそが詠んだ歌を聞いた仲忠が関心を示し、自分の袂を忠こそにかけ与える。そのうえ、「御前より、かの都風を賜はりて、同じき胡笳の声を、手尽くして弾く。さらに、さらに、惜しまずる」(春日詣、145)とあるように、その場で琴まで演奏した。ここで仲忠が弾いたのは、実は忠こそをここまで導いてくれた琴の音——あて宮が弾いたのであるが——と同じ「都風」という琴で弾いた「胡笳」という曲であり、その演奏を耳にした参詣の参加者はみな驚き、仲忠の前に集まる。それもそのはず。帝の命令にも決して琴を弾かなかった仲忠がいかなる理由で一介の行者のためにここで惜しみなく弾琴するのか、それはみんなにとって疑問であったであろう。しかし、その演奏がまたしばらく物語の世界から姿を消していた忠こそを再び『うつほ物語』の世界に呼び戻すきっかけともなる。この演奏の場面で忠こそは正頼と出会い、会話を交わす。二人の話によると、正頼と忠こそは同じ頃に殿上童として仕えていたという。さらに、忠こそが出家の事情や今までいかなる心境で彼が修行生活を続けてきたかを聞き、正頼らは悲しみや感激のあまり涙を流すまでであった。また、こうした忠こそを言葉を通しては、いかに彼が全力を尽くし仏道に邁進しているかという、信心深い僧侶としての忠こそを察知できる¹⁶⁾。

そこで正頼は忠こそに自分の子供、とくに現在入内している長女仁寿殿の女御のための祈願を願い、それを忠こそも「慎み給ふなむよきことなれば、いとよく祈願し申し侍らむ」(春日詣、147)と快く承諾する。このことは正頼が忠こそを高徳な僧侶として認めていることを意味し、物語のなかで二人の関係がこの場面で終わることなく、これからはしばらく続くことを示しているとみてもよいであろう。忠こそを尊い僧侶としての姿はこの場面のみならず物語のいたるところに表れている。例えば、「吹上・下」巻で読経の声はるかに聞こえるのを不思議に思った朱雀院の命令によって忠こそはまたも物語に登場し、朱雀院と再会を果たす。さらに嵯峨院の配慮によって真言院の阿闍梨となる。

かの行ひ人を、院の帝、限りなく勞らせ給ひて、院の内に、壇所賜ひなどして候はせ給ふ。尊き師につきてかしく受けければ、悟りいと深く、しるしあり。院奏せさせ給ひて、真言院の阿闍梨になされぬ。(吹上・下、295)

16) 「十四歳にてなむまかり籠りし。今年、二十年になむなり侍りぬる。(中略)ただ今も、熊野にまかり移るなり。去年の八月より、所々に読経奉るなり」(春日詣、146-147)

阿闍梨¹⁷⁾となった後、院の御門の付近で偶然出会った老女の物乞が実は自分をいじめ、濡れ衣を着せた継母一条北の方であったことを知った忠こそは、「阿闍梨、『今いくばくもあらじ』と見給へば、『世に経給はむ限りは、勞り奉らむ。後の屍をも納め、地獄の苦しびをも救ひ申さむ』とのたまひて、小さき小屋造りて込め据ゑて、物食はせ、衣着せなどして養ふ」(吹上・下、296)とあるように、彼女を許し、その老後まで誠実に養う。彼女が自分にやったこと、つまり、幼い自分をいじめ、それが原因で父との関係も揺さぶられ、結局出家の道を余儀なくされた過去の出来事を想起すると、彼女の行為は到底許されるものではなかったが、仏道に精進し、その功德を固く信じて生きている忠こそは一条北の方の来世の祈願まで誠意を尽くして行くことを誓う。尊き阿闍梨ならではの行動と判断であるといえよう。こうした忠こその一連の行動によってますます彼の信望が厚くなっていく。

一方、正頼の息子の宮あこが病気となる。回復のためにいろいろと手当を尽くしてみたが、ひどい物の怪のせいではなかなか治らなかった。するとここでまた高僧忠こそ活躍ぶりが披露される。「この阿闍梨につけ奉れば、かしこくて勞りやめつ」(吹上・下、296)とあるように、忠こそ加持祈祷の効果ですぐ治った。また「国譲・中」巻で忠こそは仲忠から懐妊に苦しむ妻女一宮の加持を頼まれるが、そこには次のように忠こそすばらしさが記されている。

「……消息聞こえたりつるは、ここに、立ちぬる月のつごもりより悩み給へるを、日ごろ重くなりまさりてなむ。これかれに物問はせ侍れば、『邪氣』など申す。作善など行はせ侍れど、なほ心もとなきを、ただ今は、『現れたる薬師仏にこそは』とてなむ、一夜二夜ばかりものせさせ給へ」と聞こえ給ふ。(中略)かくて、「参上り給へ」とあり。南の廂に、よき御屏風立てたり。例の、空薫物などして参り給ふ。かくて、宮に、典侍の申し給ふ、「いと腹汚く、幼くおはします。これは、何の罪にてある御心地にもあらず。知らせ奉り給はねば、おとどは騒ぎ給ふ。それはとまれかうまれ、『生きて働き給ふ仏』と言はれ給

17) 梵語の音訳「阿闍梨耶」の略で、師範または軌範師、即ち弟子の行為を正し、その軌範となる高德の師が本義である。仏教がバラモンより取り入れたもので、種々の別がある。まず小乗では、出家・受刑・教授・受経・依止の五種の阿闍梨があり、大乘では文殊を掲磨阿闍梨、弥勒を教授阿闍梨とする二種を立てる。次に密教では、広義には大日如来や諸仏菩薩、また三密に通じた高僧を阿闍梨と呼ぶが、狭義には、伝法灌頂を阿闍梨位灌頂とも称するように、伝法灌頂を受けた者、また灌頂の導師その人をさす。特に灌頂の際の正導師は大阿闍梨(略して大阿)、作法を教示する者は教授阿闍梨と称し、前者の備えるべき十三徳が『大日経』の具縁品に説かれている。平安中期には、貴顕の子弟に、その一代だけに限って官符を下して伝法灌頂職を授ける例があり、これを一身阿闍梨と称した。また、比叡山など七高山に勅命によって置かれた祈禱僧の例や、諸寺に員数を定めて配置し、欠員補充を官符を以て行う例などもあり、日本ではこれが一種の職官となった。(竹居昭男(2006)「阿闍梨」『平安時代史事典』CD-ROM、角川書店)

ふ、加持参り給へば、ともかうもこそあれ。かかる人は、さる心してこそ加持参れ。いと恐ろし。おとどに聞こえむ」と申せば、宮、「何心地とも知らず。いと苦しきは、死ぬべきにこそあんめれ」とのたまへば、「あなさがなや」などむつかり居給へり。律師は、加持参り給ふ。さらに早き陀羅尼読ます。童より声限りなくありし人なれば、まいていと尊し。(国譲・中、709-710)

女一宮のため渾身の力を振り絞って加持祈禱している忠こそについて「生きて働き給ふ仏」とまで激賞されており、読経するその声も「いと尊し」と評価されている。以上の記述からは尊い存在であり、また効験高い僧侶である忠こそその偉大さがよく表れていると思われる。しかしながら、物語ではこうした立派な求道者としての忠こそ像とはまったく異なる、別の顔を持っている忠こそその様子も散見される。「春日詣」巻で忠こそは再び登場したが、それはどこかで聞こえてくる琴の音に自然と導かれたからであった。そしてその琴を演奏したのはあて宮という正頼の娘であった。この『うつほ物語』の前半は「あて宮求婚譚」を主要なテーマとして彼女の求婚者をめぐり、さまざまな内容が展開されている。さて、「春日詣」巻における忠こそと正頼の再会の場面で忠こそはその琴を演奏したあて宮を偶然垣間見る。

夕暮れに、花を誘ふ風激しくて、御幕吹き上げたるより見入るれば、君たち九所、めでたく清らにておはします中に、あて宮、こよなくまさりて見え給ふ。忠、「かくありがたき御かたちどもの中に、こよなくまさり給へるなる人なり」など思ふに、年ごろ、かけて思はざりつる昔思ひ出でられて、「世の中に、なほあらましかば、今は、高き位にもなりなまし」など思ひ、されど、また、「ここらの年ごろ、露・霜、草・葛の根を齋にしつつ、ある時には、蛇・蜥蜴に吞まれむとす、仏の御言ならぬをば、口に学ばで、勤め行ひつる。仏の思さむこと、恐ろしく」など思ひ返せども、せむ方知らずおぼゆれば、(中略)「熊野へ」と思ひし心もなくて、「いかで、この、わが見し人見む」と思ふ心深くて、暗部山に帰りて、思ひ嘆くこと限りなし。(春日詣、148)

「あて」という名が示している通り、あて宮は非常に美貌で理想的な女性であった。忠こそはその姿に一目惚れ、出家して今まで一度も考えたことのなかった世俗のことまで想起するようになる。もし自分が出家せずそのまま朝廷で宮仕えをしていたならば、高い官職につき、あて宮に堂々と自分の魅力をアフィールすることができたのにと、無論僧侶という自分の

本分を思い出し、「仏の咎めもあるだろう」と謹んではいるものの、あて宮との歳の差も忘れ、さらに直前まで仏に自分の人生を捧げ、毎日精進していると熱く語ったことも忘れ、ただあて宮への思いを隠し切れず、愛の虜となって思い嘆く。

「吹上・下」巻で全国を回りながら、修行に励む忠こそその姿についてすでに説明したが、実はその修行というも「かの行ひ人、遙かに、思ふまじき心つきて、「そのあたりをだに、今一度見せ給へ」と、六十余国を行ひ歩きけるを」(吹上・下、286)とあるように、あて宮への思いの成就のための祈願であった。あて宮に対する忠こそその思いはますます大きくなり、もはや抑えることができない。宮あこの病気を加持した縁で、忠こそはあて宮の同腹の弟である宮あこを介してあて宮宛に手紙を贈る。しかし、その手紙に対し、あて宮は「『あなむくつけ。なでふ、さる物をお持ておはする』とて、引き破りて、捨て給ひつ」(吹上・下、297)とあるように、直ちに拒否の気持ちを示す。その後もあて宮の求婚者の一人として彼女の周囲から離れないのであるが、結局「拒否される求婚者」¹⁸⁾として、あて宮への思いは実ることのないまま終わってしまう。

ところで、再登場した忠こそその記述には次のような特徴がある。有験高德の僧としての姿が記されたすぐ後に、そうした理想的な僧侶の姿とはかけ離れた、あて宮の求婚者としての様子が描かれているという点である。高德な僧侶としてはあるまじき行為である女性への執着。忠こそはこのように高僧と懸想人の両面性の持ち主として物語のなかで造型されている。忠こそその描写におけるその両方の記述には甚だしい落差がある。そうした描写のずれはいかなる理由に起因するものであろうか。単に高德の僧があて宮に恋をするという珍奇な趣向に読者の興味を引こうとした狙いとして解釈するだけでは不十分であるような気がする。ここでは、あて宮の美貌など、その理想性を強調するとともに、出家はしたものの、その志をずっと維持するのがいかに難しいことであるか、そしてさまざまな煩惱の前では、高德な僧でさえ常に迷い、葛藤し、苦悩する人間本来の一面を持っているということを、俗人以上にあて宮への恋に悩む懸想人としての忠こそその姿を通して描き出そうとしたのではなかろうか。

4. 『うつほ』から『源氏』へ

多くの文学作品はそれぞれ独自性を持つことで、各々の作品としての価値を保つのであ

18) 室城秀之(1981)「拒否される求婚者たち〈行正・仲頼・忠こそ・藤英をめぐって〉—うつほ物語の表現と論理—」『日本文学』30(2)、日本文学協会、pp.64-75.

るが、しかしながら、いかなる作品とはいえ、そのすべてが作者の独創的な創作によって成立されているとは言い難い。先行作品や史料などの影響を受け、そこに新たな作者の構想が加わってようやく新しい作品が誕生する。

『うつほ物語』は平安時代の最初の長編物語として、その以降の作品に与えた影響は非常に大きい。とくに平安時代の、いや日本古典文学の代表作ともいえる『源氏物語』には多くの場面から『うつほ物語』の影響がみられる。例えば栗本賀代子氏は後宮空間、つまり殿舎を中心に『うつほ物語』から『源氏物語』への影響関係を分析してきた¹⁹⁾。その他も多様な角度から両作品の関連性が絶えず問われてきた。忠こそ物語も彼の多面的な造形がほかの平安朝のほかの物語に大きな影響を与えている。

継子いじめ譚としての構想は『落窪物語』につながっている。そして出家後のさまざまな忠こそその姿、とくに仏道と恋に迷う様子は『源氏物語』の第三部の主人公薫と通じているといえよう。無論薫は出家はしていないものの、幼い頃から自分の出生の秘密を知り、固い志を立て、いかなる場合でも道心を貫こうとしているその姿が宇治十帖全般に描かれている。そうした薫の道心の深さは彼の理想性の一つとしても捉えられている²⁰⁾。しかし、常に道心を求める薫の姿からは想像できないほど、大君をはじめとする宇治の三姉妹に執着する懸懸人としての姿も物語に多くみられる。大君に恋心を抱き、絶えず親交を求めつつも、結局「もの隔ててなど聞こえは、まことに心の隔てはさらにあるまじくなむ」(総角⑤238)という、二人の間に隔てを置くことによってこそ、心は隔てなく通い合えるという大君の逆説的な言葉²¹⁾によって拒まれる。さらに、妹の中の君を薫と結婚させようと思った大君の思いを察知した薫は匂宮を中の君のもとに案内し、二人を結ばせる。このような薫の行動からは道心に満ちた理想的な姿なんか一切見出すことができない。むしろ、愛執に捉われた薫の世俗的な一面が物語のなかで浮き彫りになる。さらに大君の死後、中の君を匂宮と結ばせた自分の性急な判断を後悔し、中の君にまだ恋心を抱いている自分の気持ちを隠し切れず、本人に明かす場面や、入水したと信じていた大君の「形代」として登場した浮舟が実は生きていたという事実を知り、横川の僧都にその仲介役を頼んだり、自分への返信を固く拒む浮舟に他の男の存在を疑ったりする記述からは理想的とはほど遠い欲望の塊でしかない薫像を発見することができる²²⁾。このような薫の両面性はまさに今までみてきた『うつほ物語』の忠こ

19) 栗本賀代子(2014)『平安朝物語』の後宮空間—宇津保物語から源氏物語へ、武蔵野書院、pp.1-229.

20) 尹勝玟(2012)「多面体としての薫」『日語日文学研究』83-2、韓国日語日文学会、pp.211-230.

21) 藤原克己(2005)「『源氏物語』(二)」『日本の古典—古代篇』放送大学教育振興会、pp.251-252.

22) そのほか、法華八講の際、偶然垣間見た女一宮のことが忘れられず、翌朝妻であり、女一宮の異腹妹である女二宮に同様の格好をさせるが、満たされる気持ちを抱き、また女一宮に手紙を贈る薫の

その姿と通じる部分があるだろう。忠こそと薫の造型にはこうした類似性が共通しており、これこそ『うつほ物語』から『源氏物語』への伝承関係を考える際、一つの証として理解してもよいと思われる。

それに加え、断固たる決意で出家の意を果たし、頑なな態度で絶対世俗のことを顧みることはいまいと決めていた『源氏物語』の最後の女主人公浮舟を通しては、さまざまな要因によって出家当時の決心が揺さぶられ、さらに出家さえも慰安や救済をもたらすものではないというメッセージを終幕を向かっている『源氏物語』は繰り返し強調している。出家はしたものの、あて宮への恋心のため常に煩惱し、苦しむ忠こそ物語もやはり同様の内容であり、ここでまた両方の類似性を見出すことができる。『源氏物語』の浮舟物語には『うつほ物語』の忠こそ物語の要素が一定部分反映されているとみることができよう。

以上、宇治十帖の二人の男女主人公である薫・浮舟と忠こそその造型を比べてみることで、『源氏物語』における『うつほ物語』の影響関係や意義などがある程度究明できたとと思われる。『源氏物語』がさまざまな登場人物の繊細な心理を描くことができ、日本古典文学を代表する作品となり得た理由も、実はこのような『うつほ物語』の受容と変容という過程があったに違いない。

5. 終わりに

忠こそは継子いじめ譚の主人公として『うつほ物語』に登場する。継母の謀略に騙された父千蔭の冷遇に絶望した忠こそは結局出家する。その構成上、独立性を持った短編物語的な性格が強いといわれている、彼のこうした話が描かれている「忠こそ」巻は唐突ともいわれる俊蔭一族の話との結びつきを通して長編化していく。出家後、再び物語に登場する忠こそは、有驗高德の僧としての姿が描かれた直後に、そうした理想的な僧侶の姿とはかけ離れたあて宮の求婚者、つまり懸想人としての様子を見せている。その落差について、単に高德の僧があて宮に恋をするという珍奇な趣向に読者の興味を引こうとしたねらいとして解釈するだけでは不十分で、その理想性が強調されればされるほど、出家はしたものの、その志をずっと維持するのはいかに難しいことであるか、そして様々な煩惱の前では高德な僧侶でさえ常に迷い、葛藤し、苦悩する人間本来の姿を造型しようとした作者の意図を読み

一連の行動は、彼の執拗な執着ぶりを物語の中で披露する結果を招く。尹勝玟(2013)「浮舟物語における女二宮の意義考察」『日本語文学』62、日本語文学会、pp.290-292.

取るべきであろう。その点は『源氏物語』の薫や浮舟の造型にも通じるところがある。そうした点に忠こそ造型の意義や特徴を見出すことができると思われる。

【参考文献】

- 김영찬(2011) 「『蜻蛉日記』를 통해 본 平安時代の 結婚様相考察」 『日本語文学』 55, 日本語文学会, pp.277-292. (DOI:http://dx.doi.org/10.21792/trijpn.2011..55.014)
- _____ (2012) 「葵祭를 통해서 본 일본문화 연구」 『일본어문학』 58, 일본어문학회, pp.351-366. (DOI:http://dx.doi.org/10.21792/trijpn.2012..58.018)
- 金鍾德(2010) 「継子譚의 伝承과 패러디」 『日本語文学』 48, 日本語文学会, pp.261-280. (DOI:http://dx.doi.org/10.21792/trijpn.2010..48.014)
- 김효숙(2015) 「『우쓰호 이야기(うつほ物語)』에 보이는 파사국(波斯国)에 대하여 - 『왕오천축국전(往五天竺国伝)』과의 접점-」 『동아시아고대학』 40, 동아시아고대학회, pp.217-240.
- 柳瀟先(2018) 「『宇津保物語』における秘琴の信仰的な様相」 『日本思想』 34, 韓国日本思想史学会, pp.163-187. (DOI:http://dx.doi.org/10.30615/kajt.2018.34.7)
- 尹勝玟(2012) 「多面体としての薫」 『日語日文学研究』 83-2, 韓国日語日文学会, pp.211-230. (DOI:http://dx.doi.org/10.17003/jllak.2012.83.2.211)
- _____ (2013) 「浮舟物語における女二宮の意義考察」 『日本語文学』 62, 日本語文学会, pp.290-292. (DOI:http://dx.doi.org/10.21792/trijpn.2013..62.014)
- _____ (2016a) 「平安朝物語における「遺言」の考察 - 当時の社会的実状の反映という視点から -」 『翰林日本学』 28, 翰林大学校日本学研究所, p.5-32. (DOI:http://dx.doi.org/10.18238/HALLYM.28.1)
- _____ (2016b) 「文学作品創作の原動力としての歴史的準拠考察 - 相撲の節会を中心に -」 『日本語文学』 73, 日本語文学会, p.229-254. (DOI:http://dx.doi.org/10.21792/trijpn.2016..73.011)
- 李施昀(2012) 「平安貴族の結婚と身分意識」 『日本語文学』 56, 日本語文学会, pp.193-212. (DOI:http://dx.doi.org/10.21792/trijpn.2012..56.010)
- 青島麻子(2015) 『源氏物語 虚構の婚姻』 武蔵野書院, pp.1-367.
- 大井田晴彦(1995) 「忠こそ物語の位相 - 『うつほ物語』の論理 -」 『国語と国文学』 東京大学国語国文学会, pp.27-40.
- 栗本賀代子(2014) 『平安朝物語』の後宮空間 - 宇津保物語から源氏物語へ』 武蔵野書院, pp.1-229.
- 高橋亨(1974) 「物語の発端の表現構造 - 宇津保から源氏への物語史的過程 -」 『日本文学』 23-6, 日本文学協会, pp.56-67.
- 竹居昭男(2006) 『阿闍梨』 『平安時代史事典』 CD-ROM, 角川書店
- 中野幸一(1996) 『うつほ物語』 1 (日本古典文学全集), 小学館, p.236.
- 藤原克己(2005) 「『源氏物語』 (二)」 『日本の古典 - 古代篇』 放送大学教育振興会, pp.251-252.
- 室城秀之(1981) 「拒否される求婚者たち <行正・仲頼・忠こそ・藤英をめぐって> - うつほ物語の表現と論理 -」 『日本文学』 30(2), 日本文学協会, pp.64-75.

- (2002) 「うつほ物語」 『源氏物語辞典』 大和書房、p.79.
室伏信助 (1995) 「忠こそ物語の位置」 『王朝物語史の研究』 角川書店、pp.124-125.
(DOI: <http://riss.kr/index.do>(検索日：2019.06.12.)

논문 투고 일자 : 2019. 10. 13. 논문 심사 일자 : 2019. 11. 03. 게재 확정 일자 : 2019. 11. 06.
--

 <要旨>

『うつほ物語』における忠こそ物語の意義とその特徴

尹勝玟

忠こそは継子いじめ譚の主人公として『うつほ物語』に登場する。継母の謀略に騙された父千蔭の冷遇に絶望した忠こそは結局出家する。その構成上、独立性を持った短編物語的な性格が強いといわれている。彼のこうした話が描かれている「忠こそ」巻は唐突ともいわれる俊蔭一族の話との結びつきを通して長編化していく。出家後、再び物語に登場する忠こそは、有験高德の僧としての姿が描かれたすぐ後に、そうした理想的な僧侶の姿とはかけ離れたあて宮の求婚者、つまり懸想人としての様子をみせる。その落差について、単に高德の僧があて宮に恋をするという珍奇な趣向に読者の興味を引こうとしたねらいとして解釈するだけでは不十分で、その理想性が強調さればされるほど、出家はしたものの、その志をずっと維持するのはいかに難しいことであるか、そして様々な煩惱の前では高德な僧侶でさえ常に迷い、葛藤し、苦悩する人間本来の姿を造型しようとした作者の意図を読み取るべきであろう。その点は『源氏物語』の薫や浮舟の造型にも通じるところがある。そうした点に忠こそ造型の意義や特徴を見出すことができると思われる。

Significances and Characteristics of the Story of Tadakoso in *Utsuho-monogatari*

Yoon, Seong-Min

Tadakoso appears as the protagonist of *the Story of Mamako-ijime* in *Utsuho-monogatari*. Tadakoso became a priest because he was disappointed with the curt attitude of his father, Chikage, who was enticed by his step mother. The volume of Tadakoso, where the stories of Tadakoso are found, is said to be a collection of short narratives in virtue of its structure, but it suddenly becomes a long narrative once the clan of Toshikage appears in the story. After he becomes a priest, Tadakoso comes back to the story as a virtuous priest, but he is soon described as a person who pursues Atemiya for marriage; he is portrayed as a figure whose image is far from close to that of a priest. In order to interpret this discrepancy, it is not sufficient to resort to the view that the writer attracts the readers through the strange story where the virtuous priest fell in love with Atemiya. It would be more appropriate to interpret the story in such a way that the writer intended to shape the nature of humans who suffer, provided that Tadakoso has as difficulty in maintaining his ambition as a priest, which suggests that even a virtuous priest struggles with his worry and his conflicting ideas. In this respect, the writer's intention is related to the molded image of Kaoru and Ukifune in *the Tale of Genji*, and this is where the molded image of Tadakoso is significant and characteristic.